

唐津市文化財調査報告書 第188集

芳谷炭坑跡(1)

-岸山川河川保全に伴う発掘調査-



1 下流側入口近景（北から）



2 上流側入口近景（南から）

巻頭図版 1



1 トンネル内部近景（北から）



2 トンネル断面全景（北から）

序 文

佐賀県の西北部に位置する唐津市は、玄界灘を挟み朝鮮半島に面しているという立地条件から、古くから大陸との交流が盛んに行われ、大陸文化の受容口として、非常に重要な役割を担ってきました。このことは、唐津市に所在する遺跡、あるいはそこから出土した遺物から窺い知ることができます。

しかし、その一方で、現在開発行為等によって多くの遺跡が消滅の危機に瀕していることもまた事実です。唐津市教育委員会においても、以上のような状況から、やむをえず保存できない文化財については事前の発掘調査をおこない、できるだけ正確な記録保存に努めると同時に、遺跡の保存・活用のための措置にも力を注いでいるところです。

本書は、岸山川河川保全工事に伴い、令和2年11月から12月、令和3年5月にかけて実施した、芳谷炭坑跡の本調査の調査記録です。本書が、地域住民の皆様はもとより、市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解、さらには学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いなことと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理に至るまで、唐津土木事務所並びに地元作業員の方々をはじめとする多くの人々のご理解とご協力に対しまして、心から感謝の意を表するものであります。

令和4年3月11日
唐津市教育委員会
教育長 栗原 宣康

例　　言

- 1 本書は、唐津市教育委員会が岸山川河川保全工事に伴い、令和2年11月から12月、令和3年5月にかけて実施した芳谷炭坑跡の調査報告書である。
- 2 調査は佐賀県文化課文化財保護室の指導を受け、唐津市教育委員会がこれにあたった。
- 3 調査及び本報告書作成にあたっては、佐賀県文化課文化財保護室にご協力を賜った。
- 4 現地での発掘調査は美浦雄二が担当し、遺構等の実測（写真測量）は（株）とっぴんに委託して実施した。
- 5 現地での調査写真の撮影は美浦が行った。
- 6 遺物の実測、製図は井上美代子、美浦が行った。
- 7 執筆・編集は美浦が担当した。
- 8 遺物の写真撮影は井上の協力のもと美浦が行った。

凡　　例

- 1 遺跡の名称は「芳谷炭坑跡」である。
- 2 Fig.1は昭和29年佐賀県発行の1/5,000 地図「徳須恵」を使用した。
- 3 Fig.3は唐津市発行の5万分の1図「唐津市全国」を使用した。
- 4 Fig.13は明治33年大日本帝國陸地測量部測図発行の1/50,000「唐津」「浜崎」を使用した。
- 5 掲図における方位は座標北を表す。

目 次

第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過 (Tab.1)	1
第4節 調査日誌	4
第II章 環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 唐津地域の石炭産業について	6
第III章 遺構	13
第1節 調査の概要	13
第2節 層序	13
第3節 遺構	13
第IV章 遺物	21
第1節 土製品	21
第2節 陶磁器	21
第V章 まとめ	27
第1節 遺構について	27
第2節 遺物について	27

表 目 次

Tab.1 調査の経過表	4	Tab.3 レンガ計測表	29
Tab.2 石炭を中心とした近世～近代年表 …	10	Tab.4 市内各施設のレンガ計測値	30

挿 図 目 次

Fig. 1 調査区位置図① (1/3,000)	Fig. 8 遺物実測図① (1/4)
Fig. 2 調査区位置図② (1/500)	Fig. 9 遺物実測図② (1/4)
Fig. 3 唐津市内主要遺跡位置図	Fig. 10 遺物実測図③ (1/4)
Fig. 4 断面 D2 付近土層図 (1/40)	Fig. 11 遺物実測図④ (1/4)
Fig. 5 トンネル 1 展開オルソ (1/120)	Fig. 12 遺物実測図⑤ (1/4)
Fig. 6 トンネル 1 展開図 (1/120)	Fig. 13 明治 33 年段階の主な炭坑と 運送施設 (1/80,000)
Fig. 7 上流側入口付近オルソ拡大 (1/50)、 3D 画像	Fig. 14 出土レンガ計測値の分布

卷頭図版目次

卷頭図版1

- 1 下流側入口近景（北から）
- 2 上流側入口近景（南から）

卷頭図版2

- 1 トンネル内部近景（北から）
- 2 トンネル断面全景（北から）

図 版 目 次

PL-1

- 1 作業状況（北から）
- 2 調査前上流側入口近景（北から）
- 3 下流側入口遠景①（北から）
- 4 下流側入口遠景②（北から）
- 5 下流側入口近景①（北から）
- 6 下流側入口近景②（北から）
- 7 上流側入口近景①（南から）
- 8 上流側入口近景②（南から）

PL-2

- 1 上流側入口付近石積①（北から）
- 2 上流側入口付近石積②（北西から）
- 3 上流側入口付近石積③（北東から）
- 4 上流側入口付近石積④（東から）
- 5 下流側入口付近（南から）
- 6 トンネル内部（南から）
- 7 トンネル天井部接写
- 8 下流側入口付近側壁接写

PL-3

- 1 令和3年度調査区全景（北から）
- 2 トンネル断面全景①（北西から）
- 3 トンネル断面全景②（北から）
- 4 トンネル土層断面①（北から）
- 5 トンネル土層断面②（北から）
- 6 トンネル土層断面③（北西から）
- 7 トンネル断面天井部①（西から）
- 8 トンネル断面天井部②（上部から）

PL-4

- 1 遺物（1）
- 2 遺物（2）
- 3 遺物（3）
- 4 遺物（4）
- 5 遺物（5）
- 6 遺物（6）
- 7 遺物（7）
- 8 遺物（8）

PL-5

- 1 遺物（9）
- 2 遺物（10）
- 3 遺物（11）
- 4 遺物（12）
- 5 遺物（13）
- 6 遺物（14）
- 7 遺物（15）
- 8 遺物（16）

PL-6

- 1 遺物（17）
- 2 遺物（18）
- 3 遺物（19）
- 4 遺物（20）①
- 5 遺物（20）②
- 6 遺物（61）
- 7 遺物（㉙）①
- 8 遺物（㉙）②

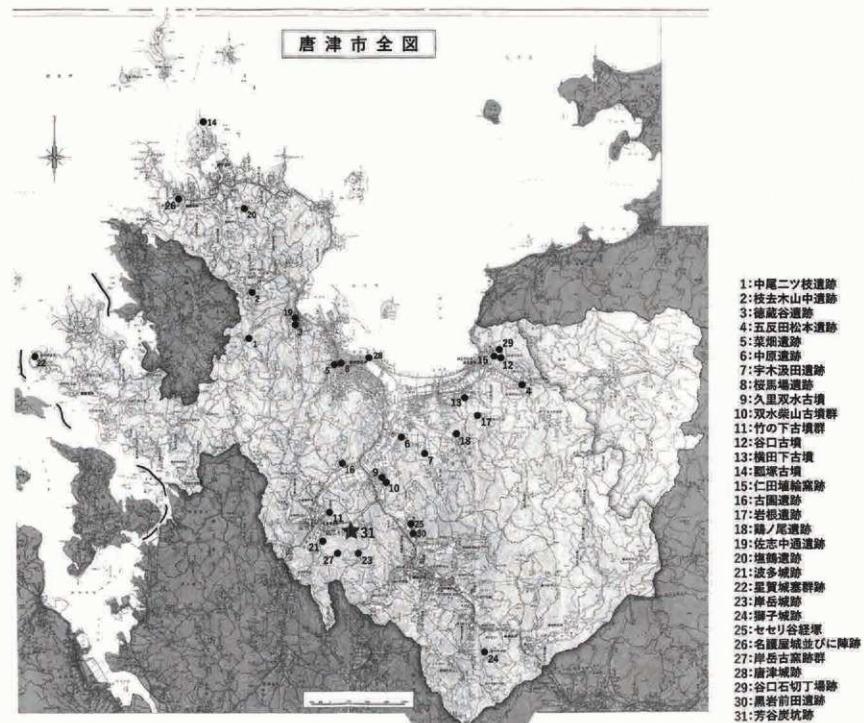


Fig. 3 唐津市内主要遺跡位置図

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成28年度の県土整備部関連の文化財協議において、唐津市北波多岸山の岸山川河川保全工事予定地に、レンガ積みの河川トンネル（隧道）があることの情報提供を受けた。そのため生涯学習文化財課では文献資料の調査や現地確認を行った。トンネルについては文献等に記載がなく、築造年代や目的を知ることができなかったが、現地確認において芳谷炭坑第三坑口の直近であり、その構造から関連する遺構の可能性が高いことが分かり、重要性を認識するに至った。

現在河川トンネルは上流側と下流側に15m程の間隔をあけ、2カ所確認できるが、トンネル入口はすべて破損しており、本来的な姿ではない。Fig.1は昭和29年に佐賀県が作成した1/5,000 地図に工事箇所を加えたものである。この地図では河川トンネルは一続きに書かれており、河川トンネル上部に現在は存在しない小道が通っていたことが分かる。そのため、河川トンネルが二つに分かれたのは昭和29年以降の可能性が高い。しかし長さは昭和29年からほとんど変わっていないことが分かった。

平成29年度以降は、文化財協議の際に工事進捗の確認を行ってきた。令和2年度には唐津土木事務所との文化財協議の進捗を受け、佐賀県文化課文化財保護室とも現地で残存遺構の重要性について協議を行った。その後河川保全工事の該当箇所の工法（Fig.2）が決まったため、遺構の保存についての協議を行ったが、トンネル壁面の痛みが激しく現地での保存が難しいという結論に至った。そのため令和2年度8月に確認調査を実施し、「芳谷炭坑跡」として登録した。その後、令和2年度9月に唐津土木事務所と委託契約を締結し、同年11月から令和3年度にかけて断続的に本調査を実施した。整理作業は調査と一部並行して令和3年度に実施した。

第2節 調査の組織

調査組織は次のとおりである。

調査団長	教育長	栗原宣康
事務局	教育部長	草場忠治
	教育副部長	櫻井実規子（令和2年度）、中山誠（令和3年度）
	生涯学習	
	文化財課長	田中和稔（令和2年度）、中山誠（令和3年度）
	文化財調査係長	草場誠司、美浦雄二
	文化財調査係	坂井清春、立谷聰明、鈴川和樹、篠城昇平、井本吏沙
	発掘等作業員	小副川初美、谷口陽一、戸田正一、若林克英、松川敏明
	文化財整理員	井上美代子、宮崎良子、山中比沙恵

第3節 調査の経過（Tab.1）

確認調査ではトンネルの残存状態を確認した。本調査は、工事の進捗に合わせて11月以降に開始した。作業は伐採と川底をさらうことを中心に行なった。12月には坑内の写真測量を行った。令和3年度は5月に工事に伴いトンネルの断面や掘削の状況を確認する調査を行った。

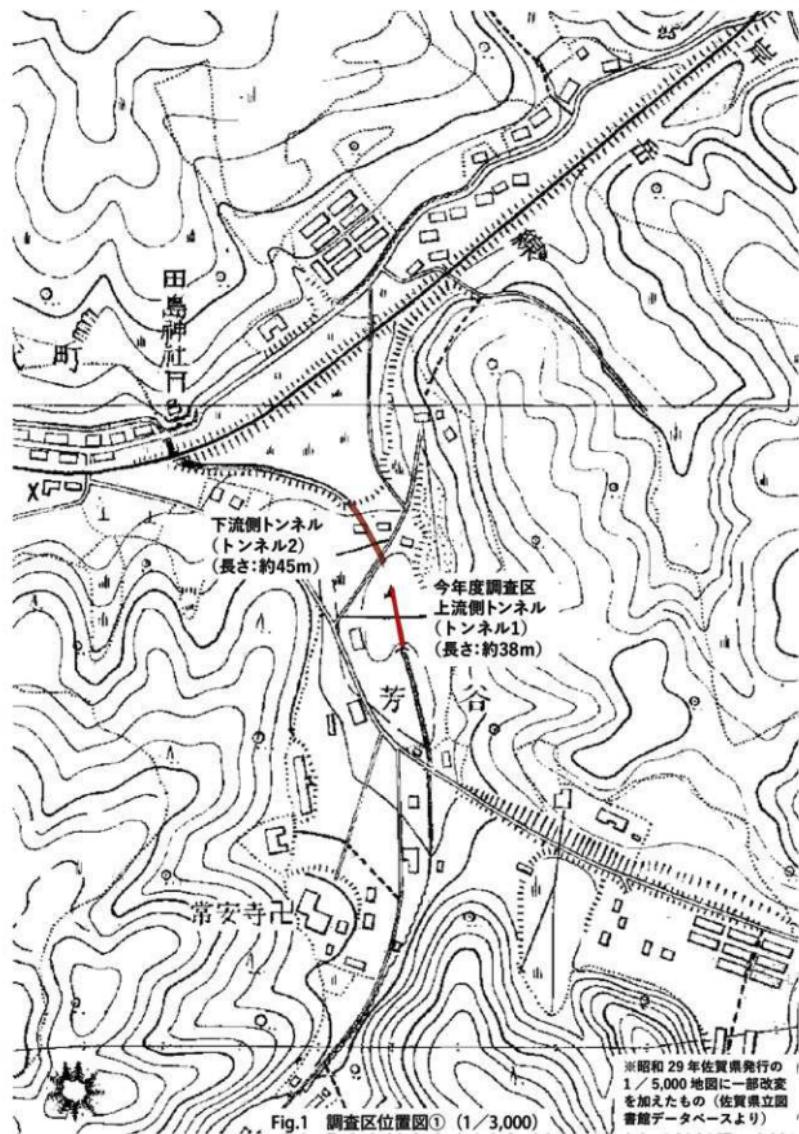


Fig.1 調査区位置図① (1/3,000)



	令和2年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
準備						■						
調査							■■■					

	令和3年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
準備	■											
調査		—										
遺物実測			■■									
報告書作成						■■■■■						
報告書印刷											—	

Tab.1 調査の経過表

第4節 調査日誌

- ・令和2年度
- 令和2年
 - 11月25日 清掃、写真撮影
 - 12月15日 清掃、写真撮影
- ・令和3年度
- 令和3年
 - 5月11日 清掃、写真撮影



第Ⅱ章 環 境

第1節 地理的環境 (Fig.3)

(1) 唐津市域の地理的環境

唐津市は佐賀県の北西部、九州島の北端に位置し、現在の市役所本庁で北緯33度27分、東経129度58分である。平成17、18年に唐津市、浜玉町、嚴木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町、七山村が合併し現在の唐津市となった。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地②松浦杵島丘陵③脊振山地西部④低地部（広義の唐津平野）⑤島嶼（東松浦半島沿岸部も含む）の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地（通称上場台地）は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に第三紀末期に噴出した東松浦玄武岩類が覆う溶岩台地である。②松浦杵島丘陵は南北に流下する佐志川及びその延長線を境にした東側の丘陵性山地であり、松浦川西岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約 200 m 内外である。③脊振山地西部は地形が急峻であり、地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部は①～③に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する平野を総称している。今回の調査地の芳谷炭坑跡は②松浦杵島丘陵に属する。

第2節 歴史的環境 (Fig.4)

唐津市域の遺跡の変遷について概観する。

旧石器時代の遺跡は中尾二ツ枝遺跡（1）や枝去木山中遺跡（2）など、上場台地に集中して見つかっている。遺跡の密集度は北部九州でも指折である。

縄文時代早期の遺跡も上場台地に多いものの、前期以降になると上場台地以外の地域でも遺跡の発見例が増加する。徳蔵谷遺跡（3）や五反田松本遺跡（4）は、唐津平野中東部の佐志川流域と玉島川流域の拠点的な遺跡である。晩期には再び上場台地で遺跡の発見例が増加する。

弥生時代以降は唐津平野に遺跡が集中する。特に宇木・半田川流域及び松浦川・徳須恵川流域に遺跡が集中している。代表的な遺跡として菜畑遺跡（5）や中原遺跡（6）、宇木汲田遺跡（7）が挙げられる。唐津市域の遺跡の特徴として、桜馬場遺跡（8）や宇木汲田遺跡などを代表に、青銅器や玉類を副葬した墳墓が非常に多く見つかっていることが挙げられる。

古墳時代も弥生時代と同様の遺跡の分布傾向が見られ、松浦川・徳須恵川流域に久里双水古墳（9）や双水柴山古墳群（10）や竹の下古墳群（11）などが築かれる。新たな動向としては、玉島川流域では谷口古墳（12）や横田下古墳（13）など、古墳の築造が盛んになることが挙げられる。また島嶼部でも後期になると、瓢塚古墳（14）など小型の古墳を中心に古墳の築造が盛んになる。古墳以外では近年、仁田埴輪窯跡（15）で生産遺跡が、黒岩前田遺跡（30）では集落遺跡の調査が行われている。

古代の遺跡は発見例が少なかったが、徳須恵川と松浦川流域の千々賀古園遺跡（16）や中原遺跡では、墨書き土器や木簡などが大量に見つかり、官衛関連遺跡であることが分かった。また市東部では古代以降、岩根遺跡（17）や鶴ノ尾遺跡（18）など鉄生産に関連する遺跡の発見例が増加している。

中世以降の遺跡も近年調査例が増えてきている。特に佐志川流域では、徳蔵谷遺跡や佐志中通遺跡（19）で館の可能性がある建物や道路跡が見つかっている。この他大型の建物跡は北部の塩鶴遺跡（20）でも見つかっている。これまで中世山城は市南部を中心にして数多く分布していることが知られていたが、

調査例が少なく、詳細は不明なものがほとんどであった。しかし近年波多城跡(21)や星賀城塞群(22)で調査が行われ、城域の構造が理解されるようになった。また岸岳城跡(23)や獅子城跡(24)では中世山城が石垣造りの近世城郭に造り変えられていることが調査により明らかとなった。この他、当地域は古國遺跡やセセリ谷経塚(25)など経塚の発見例が多いことも同時期の特徴の一つである。

近世における当地域最大の特徴は、市域の北端付近に名護屋城及び周辺に陣屋(26)が築かれたことである。全国から大名が布陣し、周辺の丘陵や浦々のほとんどが関係する遺跡となっている状態である。また近世初頭に朝鮮半島より製陶技術を取り入れられ、岸岳古窯跡群(27)が造られており、以降窯業生産が盛んになったことも大きな特徴である。陶器生産は市域の南部から伊万里市・武雄市域が中心であり、唐津焼として全国に流通していたことが知られている。

近世唐津市域の中心は唐津城跡(28)を中心とした旧城下町地区であり、調査事例も多い。近年石垣再築事業に伴い、本丸の本調査が続いている。そこでは現在の石垣の下から古い時代の石垣も見つかっており、謎に包まれた唐津城の変遷が判明しつつある。また城内の屋敷地の調査では屋敷間を通る道路の調査も行われた。城下町域では河川の護岸工事に伴い、唐津市域では初めて町屋の本格的な調査が行われた。

近年玉島川流域では谷口石切丁場跡(29)が確認され、再築大坂城に石垣石材を供給したと推測されており、大きな注目を浴びている。また佐賀県文化財課(当時)による山城の分布調査が精力的に行われ、唐津市域における中世山城及び文禄慶長の役に関連する陣跡は数量面積共に大きく増加している。

近代の遺跡については、近年国内で注目が高まっている。市内では単独で周知化された遺跡はなかったが、今回芳谷炭坑跡(31)が初めて周知遺跡となり、調査が行われた。唐津市域は幕末以降石炭の採掘が盛んであり、数多くの炭坑が開坑していたことが知られている。

第3節 唐津地域の石炭産業について (Tab.2)

唐津地域の石炭採掘の歴史は古く、伝承では唐津市北波多岸山のドウメキ地区で、享保年間に農夫が発見したとされる。石炭は江戸後期には製塩業での利用が始まったため、次第に利用が広がっていく。

幕末以降、石炭は外国船の来航に伴い蒸気船の燃料として需要が急速に高まっていく。唐津地域では北波多・相知・嚴木地区の松浦川西岸において石炭採掘が行われ、薩摩藩や佐賀藩などの藩も炭坑を開き、石炭採掘を行っていた。

唐津地域の石炭採掘は幕末～明治前期までは、湧水が少ない地点から比較的簡便な施設で採掘ができること、松浦川の水運を利用し、河口の満島港まで運ぶ運賃が他地域の炭坑よりも安かったことから採炭量は国内トップであった。明治15年に唐津港から石炭の輸出が許可され、明治22年に唐津港が特別輸出港となることで、石炭採掘が盛んになった。しかし明治22年に国内最大の三池炭鉱が三井に払い下げられ、明治24年には筑豊で鉄道が開通し、門司まで運べるようになると唐津炭田の価格的な優位性が崩れたため、次第に相対的な地位が下がっていった。

唐津地域では炭坑への大規模な資本の投入が少なかったこともあり、鉄道の開通は明治31年とかなり遅れた。明治31年に唐津興業鉄道山本－妙見間が開通し、明治32年には唐津(妙見)港が貿易港に指定されたことにより、ようやく近代的な送炭が本格化した。

国内の炭坑の大規模化は明治19年～明治27年の間に急速に進んだが、筑豊炭田では明治21～22年にかけて、選定鉱区の指定を契機とした鉱区の再編がなれば強引に進められ、大規模炭坑の開発が急速に進んだ。それに対し、佐賀県は小規模炭坑が中心であり、炭坑の大規模化が遅れたが、その中では

芳谷炭坑は借地面積が30万坪と、県内では最大級の規模を誇った。しかし、九州内ではさらに規模が大きい炭坑が多數存在していた。これが明治30年代になると、貝島や三菱による炭坑の買収が行われたことにより大規模化が進むようになる。特に三菱は相知・矢代町・牟田郡・芳谷・岸岳炭坑を次々と買収し、県内出炭量の約半数を占め、炭坑の大規模化だけでなく、採掘の近代化も大きく進むこととなった。

石炭採掘の機械化は寺の谷炭坑では明治6年に蒸気汽缶を利用しており、国内でも最初期の近代的な採掘が行われているが、佐賀県内の炭坑は中小規模の炭坑を中心であったこともあり、遅れていた。その中で芳谷炭坑は明治23年には炭坑付設工場を建設し、松浦川の廣ノ口土場までの軽便鉄道による送炭を開始しており、いち早く機械化を推し進め、質量ともに優れた炭坑となっていた。

昭和8年には不況により相知や芳谷等の三菱の大規模炭坑が相次いで閉山したため、唐津地域の石炭業は大きく衰退することとなった。昭和12年に北波多に唐津炭坑が開山したが、往年の採炭量ではなく、中小規模の炭坑が存続した。戦後の復興期は一時的に採炭量が増えたが、昭和30年代にはエネルギー革命により石炭業は急激に縮小し、昭和40年までには地域内の炭坑はすべて閉山している。

●参考文献（※報告書全体）

- 安部和城 2020 「北九州市における近代煉瓦の考古学的研究」『研究紀要 第34号』
北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室
- 安部和城 2021 「北九州市における近代煉瓦の考古学的研究2」『研究紀要 第35号』
北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室
- 市原猛志・小西伸彦 2020 「唐津炭田・芳谷炭坑の遺跡調査報告」『産業考古学 第157号』
産業遺産学会
- 相知町歎害被災者組合 1999 「石炭とともに」
- 小野田滋 2004 「鉄道と煉瓦」 鹿島出版会
- 唐津市教育委員会 2018 「唐津の明治維新と近代化」
- 唐津市史編纂委員会 1962 「唐津市史」 唐津市
- 北波多村史執筆委員会 2011 「北波多村史一通史編Ⅰ・Ⅱ」 唐津市教育委員会
- 蔽木町史編纂委員会 2011 「蔽木町史 下巻」 唐津市
- 佐賀県立図書館 データベース「古地図・絵図」
- 新版鎮西町史編纂委員会 2001 「鎮西町史 上巻」 鎮西町
- 高野江基太郎 1908 「日本炭礦史」
- 武内雅人 2016 「煉瓦の規格比定による旧池田トンネル竣工年代の推定」
『考古学研究 第63卷第2号』 考古学研究会
- 東定宣昌 1995 「唐津炭田の輸送体系の近代化」『比較社会文化』
九州大学大学院比較社会文化研究科
- 土木学会附属図書館橋梁史年表（※藤井郁夫 1992 「橋梁史年表 BC-1955」）
- 海洋架橋調査会、藤井郁夫 2000 「橋梁史年表&世界の長大橋」を基にして作成）
- 長弘雄次 1992 「筑豊炭田開発における土木技術に関する史的研究」『土木史研究 第12号』
土木学会
- 柏崎幸晴 2018 「幻の「芳谷炭坑」」 北波多の自然と歴史を守る会
- 農商務省鉱山局 1908 「明治四十年本邦鉱業ノ趨勢」
- 農商務省鉱山局 1909 「明治四十一年本邦鉱業ノ趨勢」

元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
享保元	1716	徳川吉宗将軍となる	享保年間に北波多で石炭発見と伝わる
宝曆 12	1762		水野忠任が同崎より入部
明和 8	1771		虹ノ松原一揆が起きる
天明 4	1784		木崎悠久軒が『肥前国産物図考』を描く
天明 8	1788		御仕法制開始し、石炭産業を藩が統制化
文化元	1804	ロシア使節レザノフ長崎に来航	
文化 5	1808	フェートン号事件	
文化 9	1812		水野忠邦が家督を相続／伊能忠敬が唐津藩内を測量
文化 14	1817	イギリス船浦賀へ来航	小笠原長昌が権倉より入部
文政 2	1819		1番曳山赤獅子造られる
江 戸 代	文政 8	異国船打払令発せられる	
天保 8	1837	大塙平八郎の乱／モリソン号事件	
天保 12	1841	天保の改革始まる	
時 代	天保 13	1842	濱島村に炭方役所が開設
	天保 14	1843	小川島捕鯨を藩営とする
	嘉永 6	ペリーが浦賀に、チャーチンが長崎に来航	
	安政元	日米和親条約を締結	神集島沖に黒船が現れる
	安政 2	江戸大地震	領内を外国船が航行
	安政 3	1856	小川島沖にロシア船が来航
	安政 5	日米修好通商条約を締結／安政の大獄始まる	小笠原長行が長國の名代となる
	万延元	桜田門外の変	外國船が名護屋・呼子に来航
	文久 2	生麦事件／小笠原長行が老中格となる	
	元治元	禁門の変／第1次長州戦争	相知に御手山地方鉱所を設け、三井令輔が石炭御手山掛兼山掛に任命される
	"	"	薩摩藩が椎木・相知で採炭開始
	慶応元	小笠原長行が老中格に返り咲く	この頃肥後藩と久留米藩が相知で採炭開始
	慶応 2	薩長同盟成立／第2次長州戦争	
	慶応 3	大政奉還／王政復古を宣言	この頃佐賀藩が相知で採炭開始
明 治 代	明治元	戊辰戦争起きる	小笠原長徳が石炭を新政府に献上
	"	五箇条のご誓文公布／神仮分離令	虹ノ松原一揆が再度起きる
	明治 2	戊辰戦争終結／版籍奉還	小笠原長國唐津知藩事となる
	"	鍋山解放令布告	
	明治 4	庚辰謫界	耐恒寮を設ける／唐津県廢止、伊万里県となる
	"	"	薩摩藩の炭坑を兵部省に移し、唐津海軍出張所を設置
	明治 5	鍋山心得公布	耐恒寮閉鎖
	明治 6	日本税法公布／地租改正	寺の谷炭坑開坑し、蒸気汽缶を据付ける
	明治 7	佐賀の乱（旧唐津藩士が120名参加）	
	明治 8	1875	唐津城内に唐津海軍予備炭田所を設ける
	明治 9	佐賀県が長崎県に編入	13番曳山駄と14番曳山七宝丸が造られる
	明治 10	1877	唐津城跡が公園となる
	明治 11	1878	東松浦郡役所設置
	明治 12	1879	広大な未着手鉱区が海軍予備炭山となる

Tab.2 石炭を中心とした近世～近代年表①

元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
明治	明治 15	1882 改正日本航法公布	唐津港（満島）から石炭の輸出を許可
	明治 16	1883 長崎県より佐賀県を分離	竹内綱らが芳谷炭坑開坑し、高取伊好が技術長となる
	明治 18	1885	唐津銀行設立
	" "		芳谷炭坑で下層炭の採掘開始
	明治 22	1889 大日本帝国憲法発布	矢代町炭坑、羊田部炭坑開坑
	" "		唐津町町制施行／唐津港（満島）が特別輸出港に指定される
	" "		芳谷炭坑第二坑が開坑。付属工場を建設し、鹿ノ口土場まで軽便鉄道による送炭を開始
	明治 23	1890 試業条例公布	唐津石炭用所廃止
	" "		芳谷炭坑に製瓦所を併設
	明治 25	1892	旧新大橋架橋／この頃大島邸母屋建築
	明治 26	1893	芳谷炭坑株式会社設立。芳谷炭坑と唐津間に電話開通
	明治 27	1894 日清戦争	唐津興業鉄道株式会社設立
	" "		相知炭坑開坑：初代松浦橋架橋（1901 から軽便鉄道用）
	明治 29	1896	芳谷炭坑でエンジレスロープによる送炭に切り替え
	明治 31	1898	唐津興業鉄道本社－妙見間鉄道開通
	" "		芳谷炭坑で発電機を設置し、電力自給化。山本一妙見間の鉄道送炭を開始。公社立芳谷小学校開校
	明治 32	1899	東松浦郡役所建設／唐津興業鉄道筋原－妙見間鉄道開通
	" "		唐津港（妙見）が貿易港の指定を受ける
	明治 33	1900	貝島が岩屋炭坑買収／三菱が相知炭坑を買収
	" "		軽便鉄道浜崎－満島間開通
	明治 34	1901	岸岳炭坑開坑：唐津小学校建設
	明治 35	1902 日英同盟	九州鉄道が唐津興業鉄道を買収
	明治 36	1903	唐津線全線開通／軽便鉄道が大手口まで開通
	明治 37	1904 日露戦争	芳谷炭坑で蒸気機関を電動力機関に切り替え
	" "		高取邸主屋棟建築
	明治 38	1905 試業法公布	
	明治 39	1906	矢代町炭坑を買収
	明治 40	1907	芳谷炭坑第三坑口が開坑／三菱が羊田部炭坑を買収
	明治 41	1908 石炭不況	三菱合資会社長崎支店唐津出張所建設
	明治 42	1909	唐津鉄工所（現唐津フレッシュ）が現在地で操業開始
	" "		唐津電燈株式会社設立
	明治 43	1910 韓国併合	三菱合資会社長崎支店唐津出張所が支店に昇格
	" "		広瀬水力電気が唐津電燈株式会社を吸収合併
	明治 44	1911	三菱が芳谷炭坑を買収／鉄工所は竹内試業唐津鉄工所となる
	" "		大谷川トンネル完工
	明治 45	1912	岸岳線開通／2代目松浦橋架橋／唐津銀行本店建設
(大正元)			三菱が岸岳炭坑を買収
	大正 2	1913	芳谷炭坑の採炭量のピーク（年間約 56 万 t）
	" "		唐津公会堂（東松浦郡公会議事堂）、近松座建設
	" "		唐津鉄工所旧原動機建設／軽便鉄道が佐志まで開通

Tab.2 石炭を中心とした近世～近代年表②

	元号	西暦	国内の主な出来事	唐津の主な出来事
大正時代	大正 3	1914	第1次世界大戦開戦／パナマ運河開通	桜島大噴火（唐津でも降灰）
	大正 5	1916		唐津鉄工所が独立
	大正 7	1918	この頃スペインかぜ大流行	芳谷炭坑でストライキ起こる（＝大正 6年にも）
	大正 8	1919	パリ講和条約調印	
	大正 12	1923	関東大震災	新大橋架橋／北九州鉄道福吉～浜崎間開通
	大正 13	1924	JES規格によりレンガの規格が定まる	唐津町と満島村が合併／三菱商事唐津支店が出張所に改変
	大正 15	1926		東松浦郡役所閉庁／北九州鉄道博多～東唐津間開通
	昭和 2	1927		河原橋架橋
	昭和 3	1928	第1回普通選挙	
	昭和 4	1929	世界大恐慌	北九州鉄道東唐津～山本間開通
昭和時代	昭和 5	1930		軽便鉄道を廃止し、バス運行に
	昭和 6	1931		唐津町と唐津村が合併／旧中央橋架橋
	//	//		唐津銀行と西海商業銀行が合併し佐賀中央銀行に
	昭和 7	1932	五・一五事件	唐津市制施行／岸岳炭坑閉山
	昭和 8	1933	国際連盟脱退	芳谷、相知炭坑閉山
	//	//		松浦川（材木町裏）埋立工事（～1935）
	昭和 9	1934		三菱商事唐津出張所閉鎖／千代田橋架橋
	昭和 10	1935		北九州鉄道山本～伊万里間開通
	昭和 11	1936	二・二六事件	
	昭和 12	1937	日中戦争開戦	唐津炭坑開坑
時代	昭和 14	1939	第2次世界大戦開戦／改正鉱業法公布	現松浦橋架橋
	昭和 16	1941	太平洋戦争開戦／物資統制令交付	唐津市と佐志町が合併
	昭和 19	1944		松浦川（栄町）埋立工事（～1945）
	昭和 20	1945	ボツダム宣言受諾	
	昭和 22	1947	日本国憲法施行	
	昭和 25	1950	朝鮮戦争始まる／改正鉱業法公布	
	昭和 26	1951	サンフランシスコ平和条約調印	
	昭和 28	1953		舞鶴病・旧中央橋架橋
	昭和 29	1954		唐津市が鏡村・久里村・鬼塚村・渋村と合併
	昭和 31	1956	国際連合に加盟	打上村・名護屋村が合併し、鏡西町誕生。浜崎村・玉島村が合併し、浜崎玉島町が誕生
	昭和 33	1958		入野村と切木村（一部）が合併し、肥前町が誕生
	昭和 35	1960	日米新安保条約発効	
	昭和 36	1961		捕鯨の終了／現中央橋架橋
	昭和 37	1962		現唐津市役所建設
	昭和 38	1963		唐津炭坑閉山／唐津総合庁舎を大名小路に建設
	昭和 40	1965		岩屋炭坑閉山（唐津の炭坑は全て閉山）
	昭和 41	1966		唐津城天守建設

Tab.2 石炭を中心とした近世～近代年表③ ※赤字は芳谷炭坑関連の出来事

第Ⅲ章 遺構

第1節 調査の概要

前述のとおり、現在河川トンネルは上流側と下流側に分かれている（トンネル1、2とする）。今回調査したトンネル1は現状で長さ48.8mである。幅は上流側入口が2.0mと最も広く、下流側入口が1.5m、中央付近が1.3mと中央付近が最も狭い。高さは上下流入口付近が2.3mと最も高く、中央付近が2.1mと低くなっている。中央付近の空間が最も狭くなっている。

トンネル1、2共に上流側、下流側入口は共に破損しており、現状よりも長かったことが分かる。昭和30年の地図をみると、トンネルはつながっているように記されており、当初は一本のトンネルであった可能性がある。小河川を暗渠化し、土地利用を拡大するという観点から考えると、つながっていた可能性が非常に高い。ただしレンガ積み部分の横断面形は、トンネル1が横長の楕円形を呈しており天井が低く、トンネル2は縱長の楕円形を呈しており天井が高いという差がある（註1）。

調査は河床や側壁の清掃と、トンネル入口付近の除草を主に行なった。トンネルが立体構造の長大な施設であるため、3次元計測が必要と考え、実測は業者に委託し、写真計測を行なった。

第2節 層序

令和3年度に河川保全工事の合間にトンネル断面構造の調査を行なった。調査箇所は横断面D2付近の、コンクリートで補強された石積み部分と河床部分の裏込めの部分である。①～③層まで土質に差はない。砂岩の礫と風化土壤、ボタからなる。①層と③層は礫の大きさと数量、タールの量で分層したものとの、同一層とすべきかもしれない。

側壁の西側と東側では、石積み部分の高さが異なっているが、これは崩落の影響か。ただしレンガ積み下面の高さが異なっており、元の高さが異なっていた可能性もある。①層は西側側壁の裏込めである。破線よりも河川側では礫が大きく、タールの量も多いため①層と①'層に細分している。また①層と③層はレンガ積み下面にも接している。②層は褐色～赤褐色小礫が多く、河床をコンクリート敷きにする際の現代の造成土と思われる。唯一出土した磁器片は②層と③'層の境界付近から出土した。③層は①層よりもタールと礫の量が多い。特にタールが相当含まれているのが特徴である。

第3節 遺構

トンネル1は上流側入口付近の上部に道路が通っており、その付近だけレンガ積みのひび割れが目立ち、トンネルが痛んでいることが分かる。中央より下流側は肉眼ではひび割れは確認できなかった。Fig.6のトンネル縦断面図でも天井部に凹凸があることが分かる。またトンネル中央付近と上流側にレンガ積み表面に白色結晶の塊がみられる。石灰分がツララ状もしくは結晶状に溶け出してレンガを覆っているものと思われ、レンガを接合するためのモルタルが解け出したものであろうか。白色化した部分も、詳細に観察すると、レンガ積みにひび割れがみられる。

上流側入口から1/5は、側壁下半には砂岩を用いた間知積みの石積みが残存しているが、それより下流側はコンクリート擁壁により補強されているため、河床幅が狭くなっている。河川内に落石も見られることから、側壁の一部が崩落している可能性もある。河床も上流側入口から1/5は、コンクリートで補強されておらず、部分的には水深が水面よりも0.4m以上の深さがある。その他の部分の河床はコン

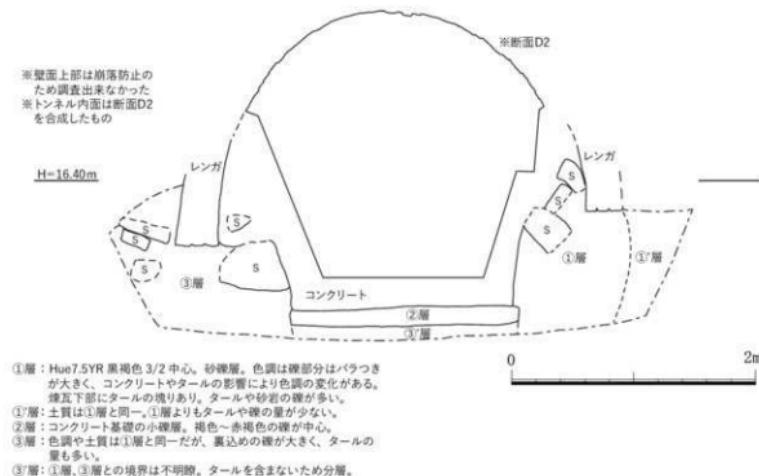


Fig.4 断面D2付近土層図 (1/40)

クリート敷きとなっており、水深は数cmである。

トンネルレンガは内面に見えているものも含め三重に積まれている（註2）。レンガの積み方は、長手積みと呼ばれるもので、レンガ間をモルタルで接着している（註3）。下流側入口から約2mの位置の天井部に、0.3m四方の窓状にレンガがない部分があり、地上からトンネル内部を確認するための窓であろうか。また下流側入口から約14mの位置にも0.15m四方の同様のものがあり、同じく確認用の窓の可能性がある。

註

- 1：河川トンネルがつながっていたと考えた場合、レンガ積み部分の形状の差が崩落の原因となった可能性を考えられる。
- 2：岸山川河川保全工事の現場担当者によると、レンガ部分の解体の際に大型重機で上から押さえつけても、びくともしなかったということである。アーチ構造の強度を示している。
- 3：岸山川河川トンネルの方が、同じ河川トンネルの大谷川隧道（唐津市千々賀、国登録文化財）の目地のモルタルよりも、丁寧に仕上げられている印象がある。大谷川隧道は地元民による作業で造ったことが差として表れているのである。また石積み部分に用いられている石材も岸山川河川トンネルでは砂岩であるが、大谷川隧道では花崗岩である。造られた年代も近いと考えられる河川トンネルであり、直線距離で約4kmと場所的にも近いが、地盤の石材の違いが現れていて興味深い。用いられる石材の差異にも今後注目する必要があろう。

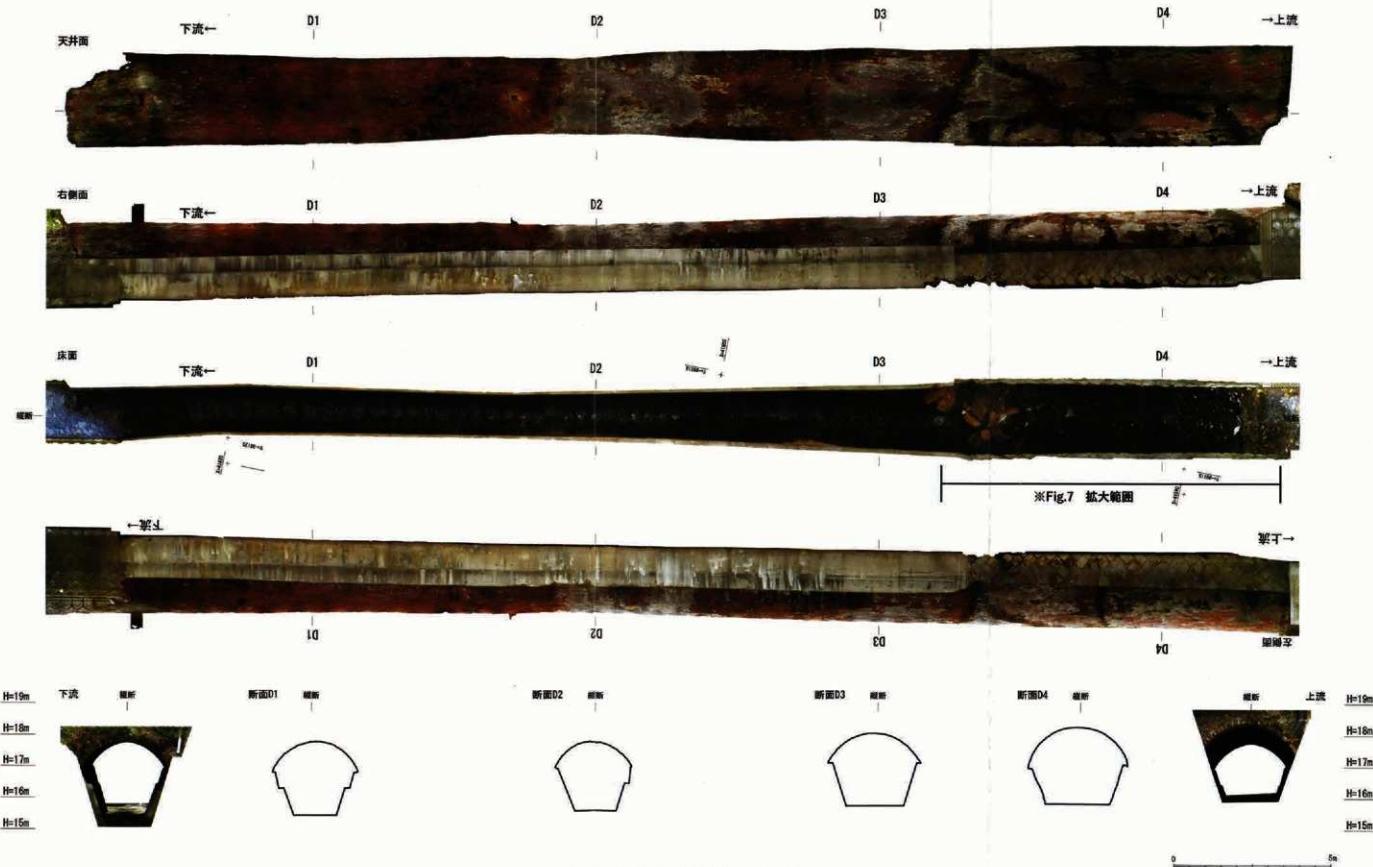


Fig.5 トンネル1展開オルゾ (1/120)

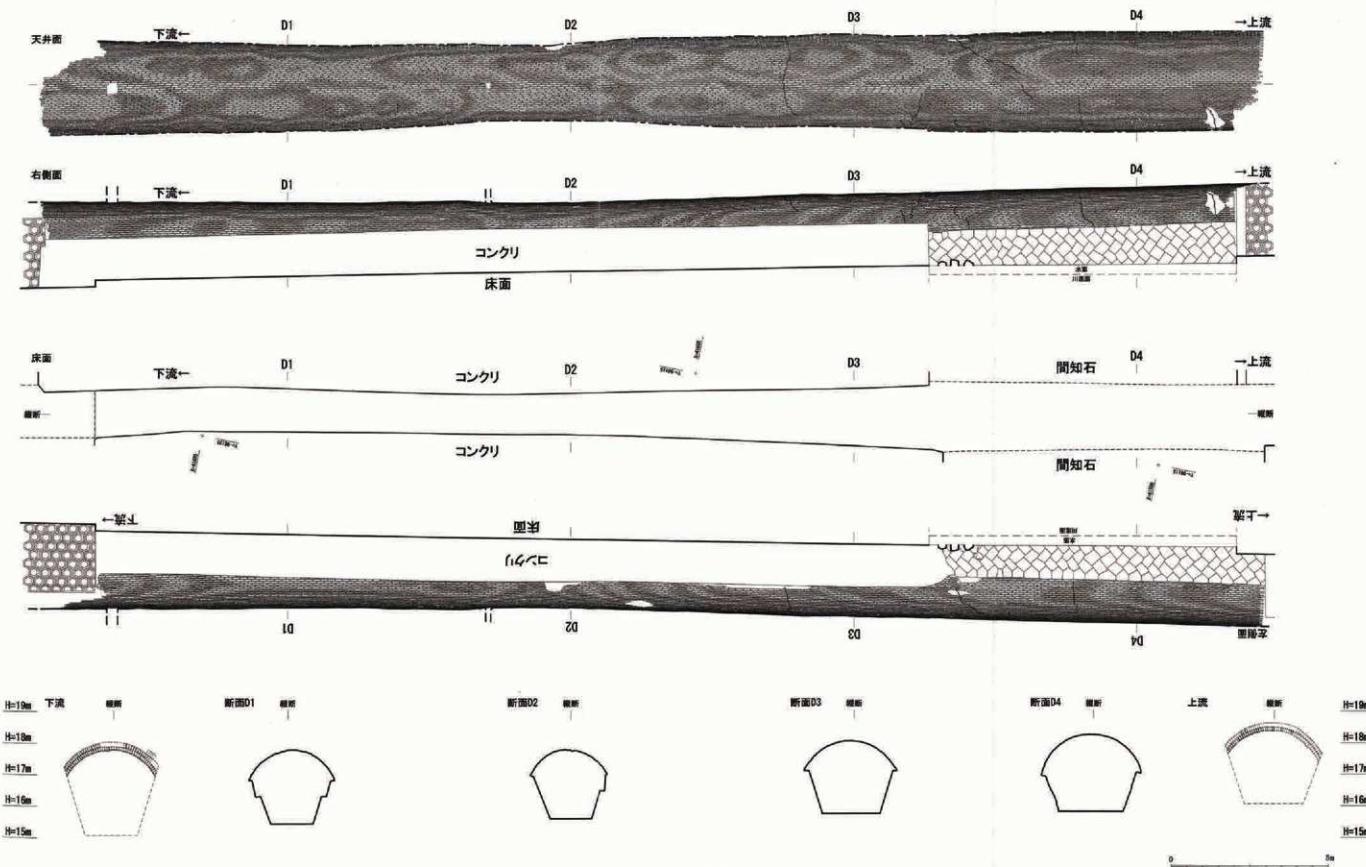


Fig. 6 トンネル1展開図 (1/120)



Fig.7 上流側入口付近オルソン拡大 (1/50)、3D 画像

第IV章 遺 物

第1節 土製品

トンネル1を構成していたレンガの一部60個を採集し、そのうち20個を実測し、40個は計測だけを行った。レンガ採集は、解体工事に伴い行った。しかし採集場所の記録をとることができなかつたため、三重になっているレンガ積みのどの部分か残念ながら不明である。厚く付着したモルタルは、その厚みを図で示すために落とさずにそのまま図化した。モルタルの付着が少ないものは、レンガの形状を図化するためにモルタルを可能な限り除去した。そのためモルタルが付着したもの重量は、他の遺跡から出土したレンガと比較することはできない。

計測値は第V章まとめのTab.3に掲載している。レンガはひずみのため、測る位置により法量に数mmの差があり、また欠けや付着物を避けて計測したものもある。そのため表の値は一個体あたり数mm程度の差を含んだ数値である（註1）。

今回の出土品は磁器1点を除きすべてレンガである（註2）。

1は長さ24.5cm、幅12.2cm、厚6.5cmと出土品中最も法量が大きい。北九州市の事例をみても（阿部、2020）、24cmを超えるものではなく、かなりの大型品であることが分かる。唐津市内の他の事例を見て最も大きい。左側面が石灰化しており、トンネル内面の可能性がある。2はモルタルの付着が厚く、レンガ同士を接合する際には、モルタルの厚みは2cmを超えることが分かる。また2も含めて今回出土したレンガに付着したモルタルには、炭化物（石炭小片もしくはボタ小片）が多く混じっており、炭坑遺跡という性格を示しているものであろう。3は上下面ともにナデが粗い。5は上面に布痕跡が確認できる。右側面に厚さ1.0cm程度のモルタルが付着する。左側面には焼成時の粘土等の融着物が残る。7は実測していない下面のナデが粗く、製作時の工具痕と思われる。8は上下面共に粗いナデが施される。左右側面には収縮時？のひび割れがみられる。10は側面に少量の粘土が付着する。また焼け歪みも認められる。下面のナデが粗い。11は上面に幅2cm程度の縦方向の細かな凹凸が残存する。また表面に布痕跡が残る。12も上面に布痕跡があり、下面には幅2cm前後の細かな凹凸が残存する。また焼け過ぎによる反りや剥離及び自然軸、融着が認められる。11と12は他のレンガとは調整が異なる。14は右側面にレンガが付着しており、乾燥時に隣接するレンガと接触したものと思われる。15は焼成時に温度が上がり過ぎており、窓内で融着したものが全体的にみられる。右側面は焼成時の割れやひずみが大きい。また上面に1.5cmの厚さのモルタルが付着する。16は上面に布痕跡が残る。17は上面に原体不明の圧痕が付く。一部は繩の痕か。また左右側面に粘土が融着する。18は上面に木質？の圧痕が付く。19は上面を中心にして弥生土器のハケ目調整のような痕跡が残る。弥生土器と同じように、木の板による調整が行われたのであろう。ハケ目様の調整痕跡は側面にも残る。19は他のレンガと比べ調整が丁寧である。20はモルタルにより上下につながったレンガである。レンガ間のモルタルの厚みは1.0～1.5cmであり、他のレンガに付着したモルタルと同じ厚みであり、モルタルを塗る際の厚みが分かる。上部のレンガは破面にもモルタルが付着しているため、割れもしくはひびが入ったものが使用されていた可能性がある。

第2節 陶磁器

61は磁器小片。蓋。トンネル河床のコンクリート基礎の②層と③'層の境界付近から出土している。レンガ以外の出土品は61だけであった。

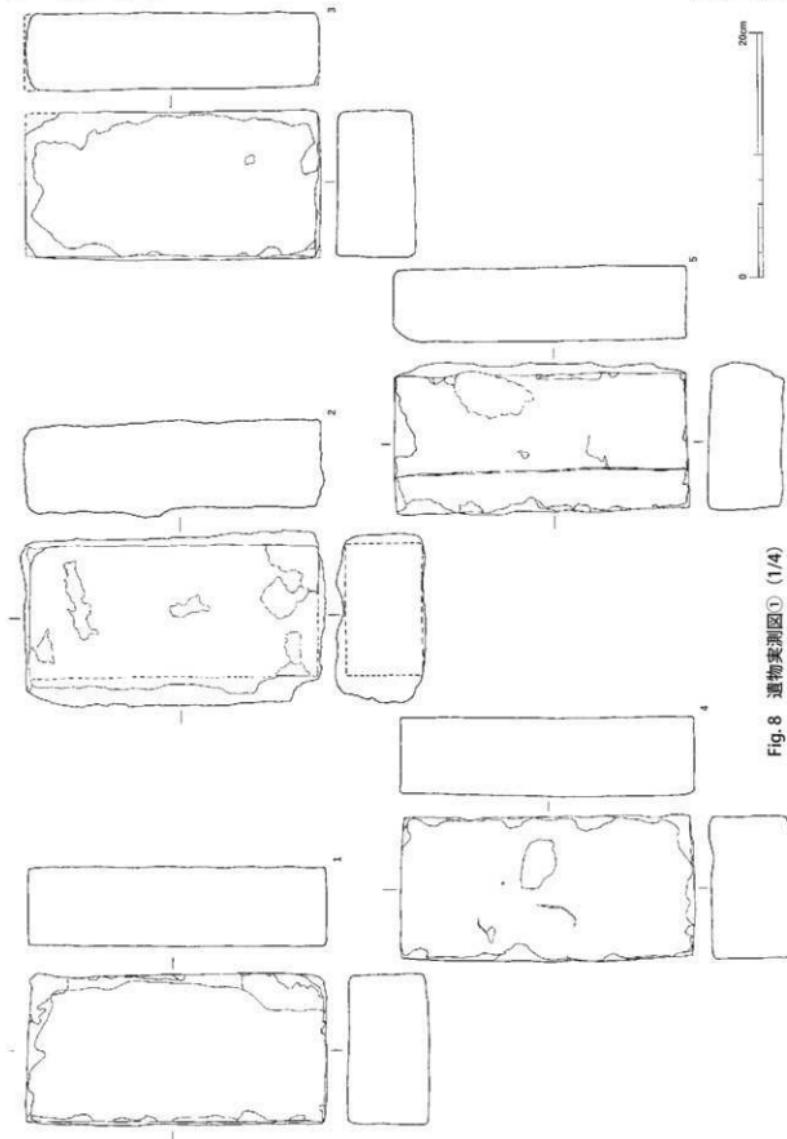


Fig. 8 遺物実測図① (1/4)

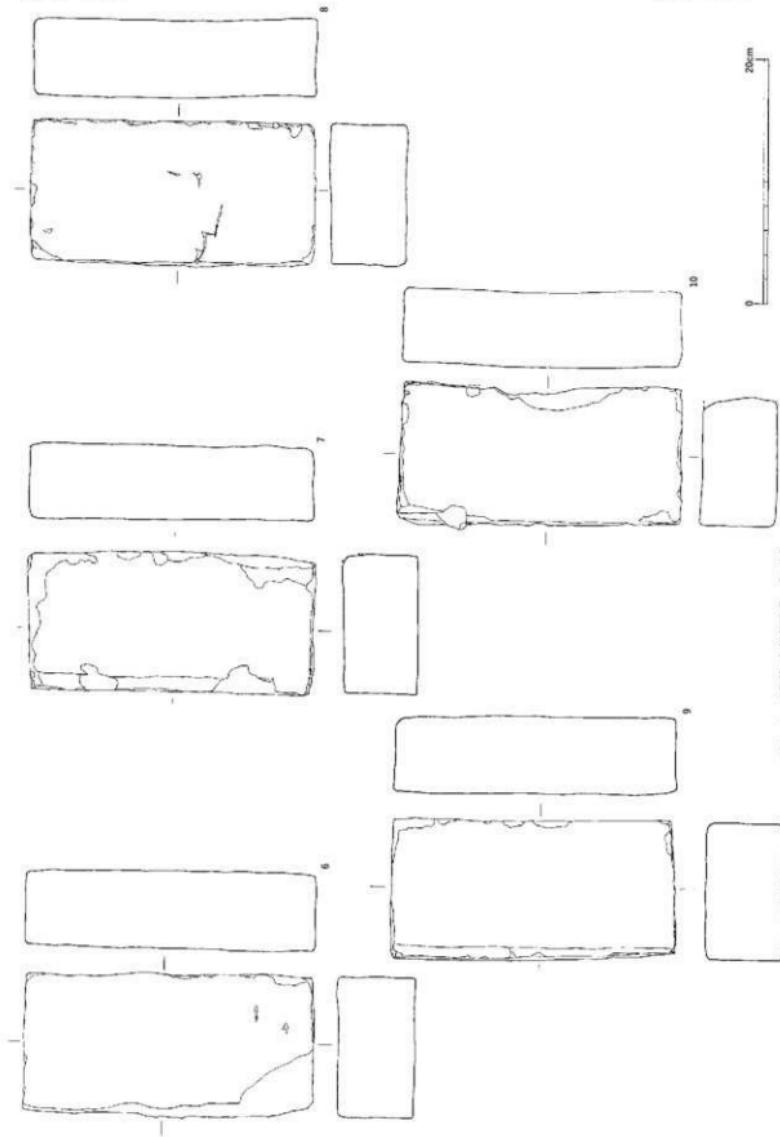


Fig. 9 遺物実測図② (1/4)

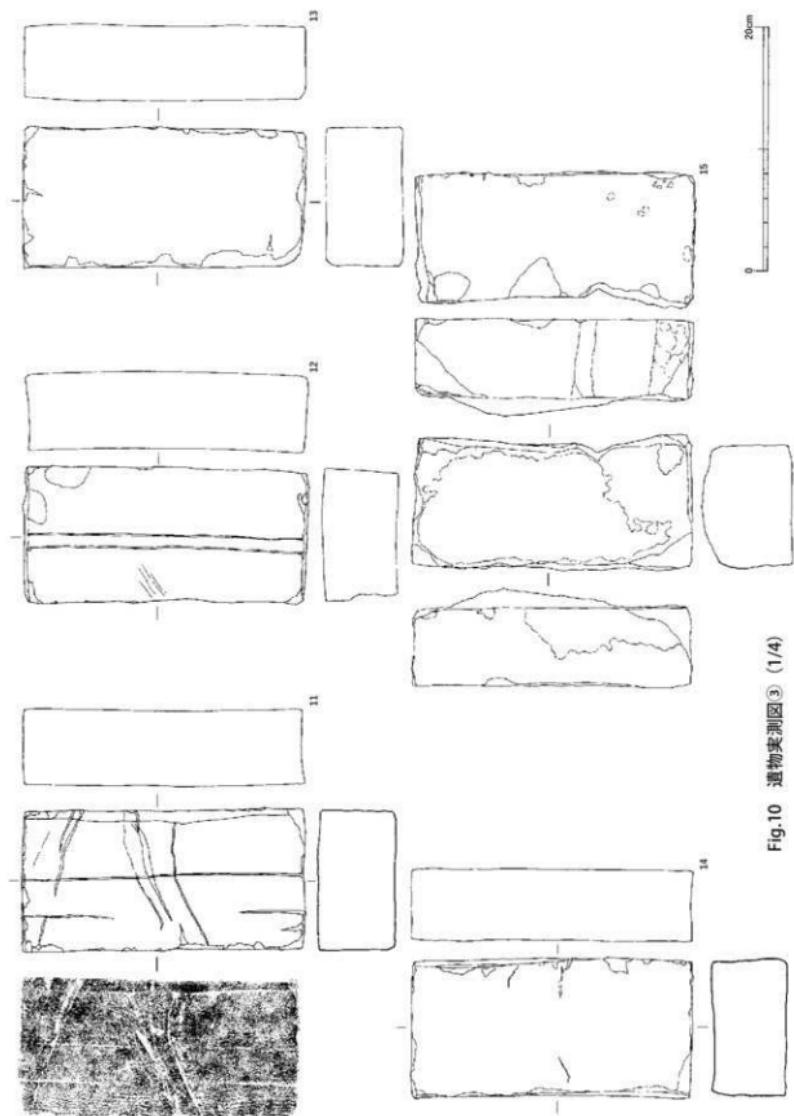


Fig.10 遺物実測図③ (1/4)

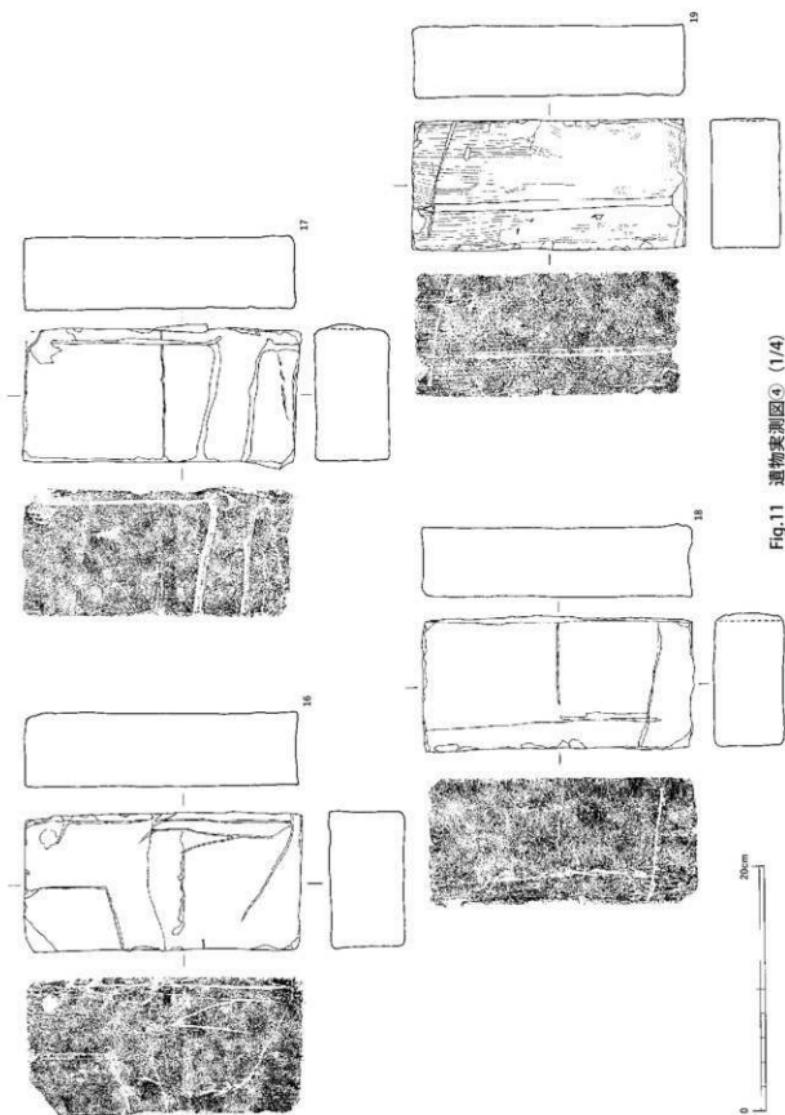


Fig.11 遺物実測図④ (1/4)

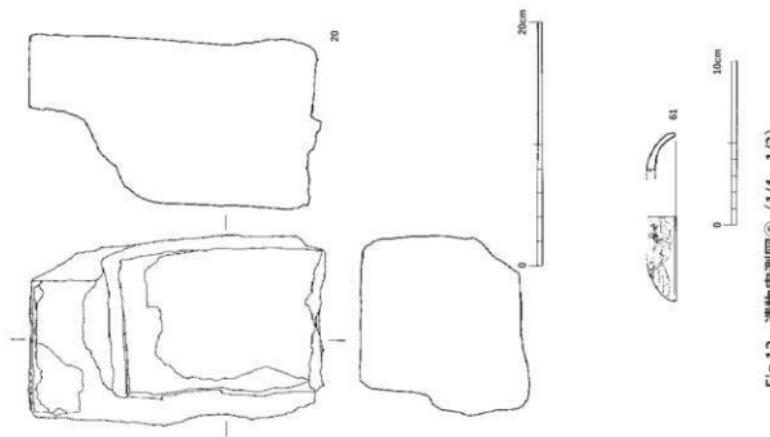


Fig.12 遺物実測図⑤ (1/4, 1/3)

註

- 1: レンガの先行研究では法量を 0.1mm まで計測しているが、JIS 規格では長 210mm (許容差 $\pm 5.0\text{mm}$)、幅 100mm (許容差 3.0mm)、厚 60mm (許容差 2.5mm) と数ミリ程度の差は許容範囲とされており、本報告では 1mm (0.1cm) までの計測とした。
- 2: レンガ製造においては、型抜き時の上面下面があるが、今回は基本平側の片面だけを実測することとしたため、任意に上面下面を設定した。

第V章 まとめ

第1節 遺構について

今回、佐賀県内で初めて近代炭坑関連遺跡の発掘調査を行った。安全面に配慮する必要があったため、得られた所見は多くないかもしれないが、レンガ積みの際に造成土にタール状の液体を混ぜているのは発見であった。施工を安定的に行うためであろうか。

唐津市内では河川トンネルとしては、大谷川隧道（唐津市千々賀、明治44年完成）が知られている。大谷川隧道は、山体を削り抜いて造られた河川トンネルであり、小河川の暗渠化を目的とする岸山川とは施工方法が異なることが予想される。

岸山川河川トンネルの築造年代の根拠資料は現地調査でも、文字記録としても発見できなかった。ただし第三坑口については、「日本炭礦史」「明治40年本邦鉱業ノ趨勢」記載により明治40年と分かった。そのため岸山川河川トンネルもその頃に造られた可能性が高い（註1）。

第2節 遺物について

グラフ（Fig.14）は縦軸に幅／厚、横軸に長さを置いた。大正13年に定められたJES規格の数値が左端にあり、トンネルIに使用されたレンガは、JES規格に準拠していないことが理解できる。出土品のレンガの長さの平均値は23.4cm、幅／厚は1.85である。23.5cm前後にある程度集まるものの、法量のばらつきが非常に大きい。レンガ規格を揃える意図が薄いように感じる（ただしレンガの使用位置による法量差を考慮していない）。集中城には小野田氏の論考（2004）のIV-I類が含まれている（註2）ため、この規格のレンガが用いられていることが分かる。それ以外の小野田分類規格のものは、ほとんど用いられていない。また22cm代のものはトンネルIのレンガには少ないが、逆に長さが24cmを越えるものが複数点確認されていることは大きな特徴である。このサイズのレンガは、前述の小野田氏や安部氏（2020）の論考からみても相当長大な規格といえる。地方で生産されたレンガの特徴もしくは建設用のレンガの特徴なのであろうか。今後他地域も含め、炭坑関連施設と比較検討も必要である。

Tab.4の表に上げている市内各施設とのレンガの計測を行い、Fig.14、Tab.4に含めている（註3）。各施設は明治40年代のものが多い。これは唐津周辺へのレンガ構造物の広がりを示すものと思われる。各平均値を比較すると、トンネルIの規格とは異なる規格のレンガが用いられていることが分かる。多くの施設は小野田分類III類であり、鉄道関係は小野田分類V類に含まれるようである。この中で第三坑口だけは、今回の集中城に近いため、関連性がうかがえる。また濾過池は同じ芳谷炭坑内の施設であるが、用いられたレンガが異なっていることも注目できる（註4）。

トンネルIに使用された小野田分類IV類は使用事例が多くないようで、九州では特に少ないとされる（小野田、2004）。なぜこの規格のレンガが用いられたのか（註5）、今後も追及する必要があろう。

註

1：この他、宿毛市歴史館所蔵の「竹内明太郎日記」も今後確認が必要である。明治期の炭坑については、「鉱山統計便覧」（明治25年～29年）と「本邦鉱業ノ趨勢」（明治39年～）間のまとまった統計情報をアーカイブからは得ることができなかった。今後冊子資料も含めて探す必要がある。

2：①類の設定は出土品によった。分類はレンガの規格が各辺の長さによると考えたため、幅／厚と長さをグラフ化した。

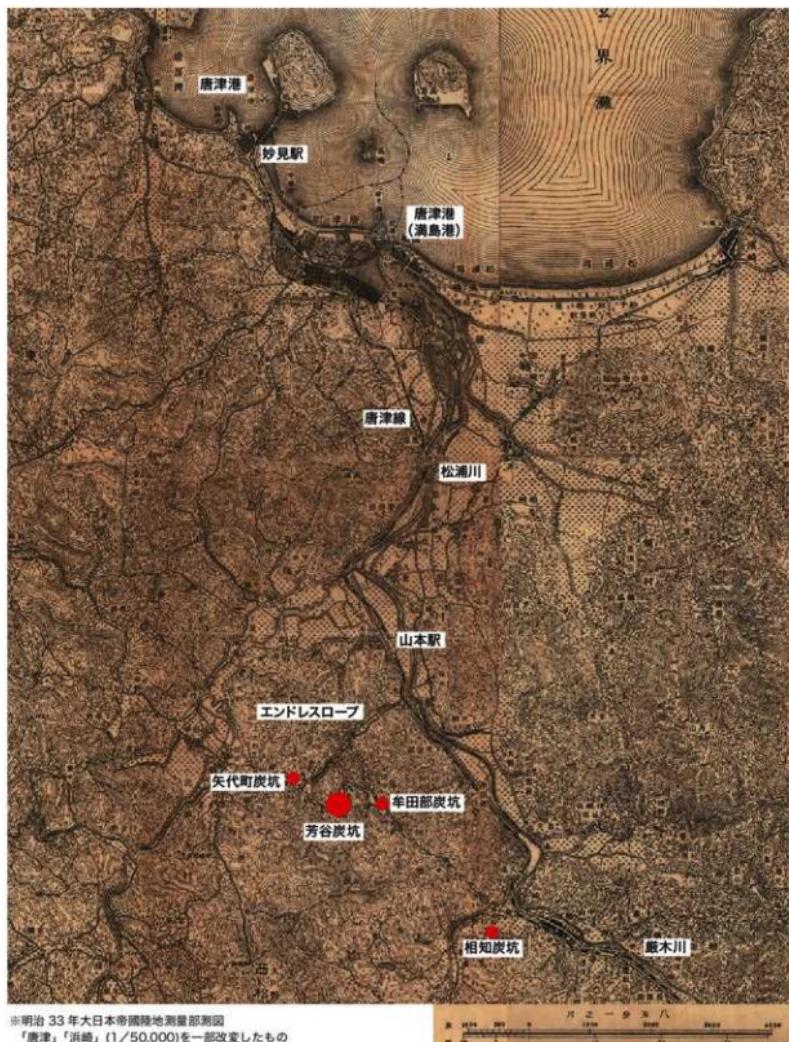


Fig.13 明治 33 年段階の主な炭坑と運送施設 (1/80,000)

ただし各施設や小野田分類を加えた場合、再検討が必要である。レンガは規格品であるが、丁寧に作られたものではないことから、JIS 規格の許容差のように一定程度のばらつきが存在するようである。

3: 各施設 10 ~ 20 個のレンガの計測を行い、その平均値を出した。ただし計測した各施設は現役であり、レンガ全返を計測することはできないので、異なるレンガの計測値を合わせた。現役の構造物はレンガの目地をモルタルで仕上げてあり、レンガの規格差をある程度均されたものである。そのため出土品を基に全返を計測した今回の数値と比較検討する場合、注意が必要である。しかしトンネル 1 と比べ各施設で使用されたレンガは法量差が小さいことは指摘できる。

4: 滝過池のレンガ計測値は市原氏・小西氏の論考（2020）によった。滝過池については「明治四十一年本邦鉱業ノ趨勢」によると、明治 41 年中には工事完了予定であることが記されている。

5: 芳谷炭坑経営者の竹内明太郎氏は、全国で鉱山等の経営を行っており、関係施設で使用されたレンガの調査も必要であろう。

今回の調査は前述のとおり、佐賀県初の近代の炭坑開運遺跡の調査であり、手探りで始めたものであったが、レンガ積みのトンネルについて知見を得ることができたことは大きい。周辺他県の自治体ではすでに調査知見が積みあがりつつあり、今回の調査により、県内の近代遺跡の調査が少しでも活性化することを期待する。

最後になりましたが、協議・調整に携わった唐津土木事務所職員の皆様、工事を担当された福井建設の皆様、同僚職員、調査及び整理作業に従事していただいた発掘作業員並びに整理員の皆様に御礼申し上げます。

Tab.3 土出レンガ遺物観察表

遺物No.	法 厘	西 面	西 幅	西 厚	幅/ 厚	重さ(g)	実 積
1	24.5	12.2	6.5	1.88	3,250	1	
2	23.5	11.3	6.1	1.85	2,760	18	
3	23.1	11.3	6.3	1.79	2,950	10	
4	23.0	11.1	6.1	1.82	2,750	13	
5	23.0	11.4	6.2	1.84	2,850	11	
6	23.0	11.1	6.3	1.76	2,790	14	
7	22.3	10.7	6.0	1.78	2,740	2	
8	22.5	11.0	6.0	1.83	2,600	9	
9	23.3	11.7	6.3	1.86	2,950	3	
10	24.2	12.0	6.3	1.90	2,950	4	
11	23.8	11.3	6.0	1.88	3,060	5	
12	23.0	11.4	6.2	1.84	2,650	6	
13	23.9	11.8	6.4	1.84	3,020	12	
14	23.7	11.5	6.4	1.80	2,980	17	
15	22.1	10.2	5.6	1.82	2,440	19	
16	22.0	10.5	5.7	1.84	2,380	8	
17	22.9	11.1	5.9	1.88	2,900	7	
18	23.5	10.7	6.3	1.70	3,750	15	
19	22.7	11.0	6.4	1.72	2,920	16	
21	23.0	11.0	6.0	1.83	3,200	—	
22	23.5	12.0	6.0	2.00	3,300	—	
23	23.5	12.0	6.3	1.90	3,100	—	
24	23.5	11.5	6.3	1.83	2,950	—	
25	24.0	12.0	6.3	1.90	3,400	—	
26	23.3	11.3	6.3	1.79	2,950	—	
27	23.5	11.0	6.0	1.83	2,950	—	
28	24.0	11.0	6.0	1.83	3,250	—	
29	22.8	11.3	6.2	1.82	2,850	—	
30	23.5	11.0	6.0	1.83	2,750	—	
31	23.8	11.5	6.0	1.92	3,150	—	

遺物No.	法 厘	西 面	西 幅	西 厚	幅/ 厚	重さ(g)	実 積
32	23.0	11.0	6.3	1.75	3,050	—	
33	23.3	11.2	6.0	1.87	2,500	—	
34	23.8	11.2	6.5	1.72	3,300	—	
35	23.8	12.0	6.2	1.94	3,450	—	
36	23.0	11.5	6.1	1.89	3,000	—	
37	23.3	11.5	6.2	1.85	3,200	—	
38	23.5	11.3	6.0	1.88	3,250	—	
39	23.3	11.5	6.0	1.92	3,100	—	
40	23.3	11.3	6.0	1.88	3,100	—	
41	23.3	11.5	6.3	1.83	3,000	—	
42	24.0	11.3	6.3	1.79	2,900	—	
43	24.3	11.6	6.2	1.87	3,300	—	
44	23.7	11.5	6.3	1.83	3,400	—	
45	23.8	11.5	6.5	1.77	3,450	—	
46	23.5	11.5	6.2	1.85	3,210	—	
47	23.8	11.5	6.0	1.92	3,270	—	
48	23.2	10.2	6.2	1.65	2,820	—	
49	23.4	11.0	6.0	1.83	3,280	—	
50	23.5	11.2	6.3	1.78	3,200	—	
51	23.3	11.3	6.1	1.85	2,950	—	
52	23.3	11.3	6.0	1.88	3,100	—	
53	23.3	11.8	6.4	1.84	2,700	—	
54	23.5	11.3	5.8	1.95	2,850	—	
55	23.8	11.7	6.3	1.86	3,000	—	
56	23.2	11.2	5.9	1.90	3,100	—	
57	23.8	11.4	6.1	1.87	3,060	—	
58	23.8	11.2	6.0	1.87	3,050	—	
59	23.3	11.3	6.0	1.88	2,990	—	
60	23.2	11.0	6.0	1.83	3,000	—	
20	23.9	15.1	13.7	—	6,000	20	

※はモルタルが付着したもの

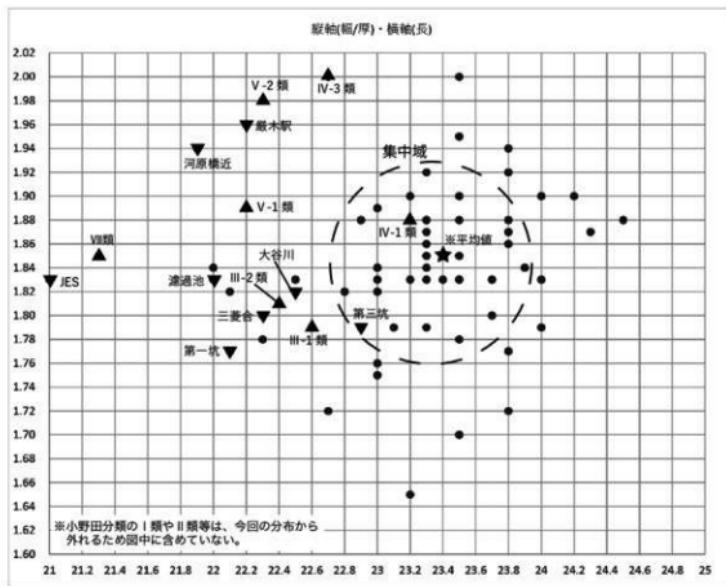


Fig.14 出土レンガ計測値の分布

施設名と計測位置	器長	器幅	器厚	年代	小野田分類	図中
旧三義合資会社唐津支店建物基礎	22.3	10.8	6.0	M41	III	三義合
大谷川(河川)トンネル下流側入口側壁	22.5	10.9	6.0	M44	III	大谷川
河原橋付近鉄道高架	21.9	10.5	5.4	M30頃	V	河原橋付
巣木駅給水場	22.2	10.6	5.4	M32頃?	V	巣木駅
第一坑 (市原・小西)	22.1	10.6	6.0		III	第一坑
溝池 (市原・小西)	22.0	11.0	6.0	M41か	III	溝池
第三坑口入口付近壁面	22.9	10.9	6.1	M40	IV-1か	第三坑
岸山川(河川)トンネル平均	23.4	11.3	6.1	M40前後	IV-1か	平均値
JES 規格	21.0	11.0	6.0	T13	VII	JES
IV-1類 (※小野田分類)	23.2	11.3	6.0		—	IV-1類
IV-3類 (※小野田分類)	22.7	11.0	5.5		—	IV-3類
III-1類 (※小野田分類)	22.6	10.9	6.1		—	III-1類
III-2類 (※小野田分類)	22.4	10.7	5.9		—	III-2類
V-1類 (※小野田分類)	22.2	10.6	5.6		—	V-1類
V-2類 (※小野田分類)	22.3	10.7	5.4		—	V-2類
VII類 (※小野田分類)	21.3	10.2	5.5		—	VII類

Tab.4 市内各施設等のレンガ計測値



① 作業状況（北から）

③ 下流側入口遠景①（北から）

⑤ 下流側入口近景①（北から）

⑦ 上流側入口近景①（南から）

② 調査前上流側入口近景（北から）

④ 下流側入口遠景②（北から）

⑥ 下流側入口近景②（北から）

⑧ 上流側入口近景②（南から）



- ① 上流側入口付近石積①（北から）
- ③ 上流側入口付近石積③（北東から）
- ⑤ 下流側入口付近（南から）
- ⑦ トンネル天井部接写

- ② 上流側入口付近石積②（北西から）
- ④ 上流側入口付近石積④（東から）
- ⑥ トンネル内部（南から）
- ⑧ 下流側入口付近側壁接写



- | | | |
|-------------------|-------------------|------------------|
| ① 令和3年度調査区全景（北から） | ② トンネル断面全景①（北西から） | |
| ③ トンネル断面全景② | ④ トンネル土層断面① | ⑤ トンネル土層断面②（北から） |
| （上部から） | | （北から） |
| ⑥ トンネル土層断面③（北西から） | ⑦ トンネル断面天井部①（西から） | |
| ⑧ トンネル断面天井部（上部から） | | |



- [1] 遗物 (1)
- [3] 遗物 (3)
- [5] 遗物 (5)
- [7] 遗物 (7)

- [2] 遗物 (2)
- [4] 遗物 (4)
- [6] 遗物 (6)
- [8] 遗物 (8)



- 1 遗物 (9)
- 3 遗物 (11)
- 5 遺物 (13)
- 7 遺物 (15)

- 2 遺物 (10)
- 4 遺物 (12)
- 6 遺物 (14)
- 8 遺物 (16)



- ① 遗物 (17)
- ③ 遗物 (19)
- ⑤ 遗物 (20) ②
- ⑦ 遗物 (21) ①

- ② 遗物 (18)
- ④ 遗物 (20) ①
- ⑥ 遗物 (61)
- ⑧ 遗物 (21) ②

報告書抄録

ふりがな	よしのたにたんこうあと (1)							
書名	芳谷炭坑跡 (1)							
副書名								
卷次	第188集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	美浦 雄二							
編集機関	唐津市教育委員会							
所在地	佐賀県唐津市南城内1番1号 大手口センタービル6階							
発行年月日	令和4年3月11日							
ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○.○○°	東経 ○.○○°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしのたに 芳谷 たんこうあと 炭坑跡	佐賀県 唐津市 北波多岸山 397- 33 他水路敷	412023	0724	33° 22' 26"	129° 58' 01"	202011 202105	95m ²	岸山川河 川保全
所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
芳谷炭坑跡	生産遺跡	近代	トンネル	磁器 レンガ	佐賀県内で初めて炭坑関連遺構の本格的な発掘調査となった			

発掘現場から



唐津市文化財調査報告書 第188集

芳谷炭坑跡(1)

令和4年3月10日印刷

令和4年3月11日発行

編集・発行者 唐津市教育委員会

唐津市南城内1-1

印刷所 呼川プリント

佐賀県唐津市江川町702